

「生かす」「裁く」これは相反する言葉で、これは全く違う方向を向いています。裁くことは時として人を縛ったりなくしたりします。どうして裁きながら「生かす」ことができるのでしょうか。（ヨハネ8：1～11）ここには姦淫の罪で捕らえられた女性が出ています。この当時の悪い人を3つ上げろというと「罪人、姦淫をする者、取税人」と言われていました。パリサイ人たちはこの姦淫の女を捕らえてイエス様の前に連れてきました。しかし彼らはこの女をどうしたらよいか神に聞いたわけではなく、これまでの律法とは違う角度から、人を生かし、新しい人生へと導く教えをするイエス・キリストが憎かったので、どうにかして陥れようとしていたのです。これに対してイエス様は見事に律法を守りながら女性も生かし、変えました。また同時に神をあがめる力をいただくことができます。「人を赦すことこそ本当の権威である」これは映画「シンドラのリスト」の中で、主人公であるシンドラが自分を権威者であると思っていたドイツ人将校に言った言葉です。そしてその言葉によりこの将校が心を改め人を赦すようになる姿が描かれています。神の赦しの権威はもっとすばらしいものです。裁判の中で、弁護人は被告人がどんなに悪くても、弁護人としての責任を負って弁護します。イエス様も一緒です。イエス様はどんな状況であっても私たちを弁護し、守り、そばにいてくださいます。パリサイ人につかまった姦淫の女を「置いた」（ヨハネ8：3）とあります。置いたという表現は普通、人にはあまり用いませぬ。人々（特にパリサイ人）が、この姦淫の女を邪魔物に考えていたことがわかります。そしてみんなが立っている中、ただ真ん中に座り込むことでさえ、とても辛いことです。しかし人々の視線は姦淫の女をさばくだけのものでした。「しかし、イエスは身をかがめて、指で地面に書いておられた。」（8：6）これがイエス様の姿です。①**イエス様は来て下さる。**私たちがみじめで、どうしようもならないときに、一番先に近づき、同じ高さまで下がってくれるのがイエス様です。「インマヌエル」（主がともにおられる）「わたしは、あなたがたを捨てて孤児にはしません。」（ヨハネ14：18）「わたしはあなたがたを友と呼ぶ。」（ヨハネ15：15）そういつてくださるのがイエス様です。自分がした失敗、過去の過ち、私たちは様々なことで倒れこんでしまいますがここにイエス様が来て一緒にいてくれます。放っておかないのがイエス様です。そして教会はイエス様を表しています。そしてここから、人々はどこからも得ることのできない平安や希望を持つことができるのです。②**イエス様の心で人を見る。**そうでなければこのような働きはできません。私たちは人間です。だから持ちやすいのは「人の心」（肉の心）です。そしてこの「肉の心」を変えて「霊の心」（神の心）に変えてくださるのは神の愛であり、人をこれまでとは違う目で見ようとさせてくれるのも神様です。「私たちは赦された罪人に過ぎない」私たちも罪人です。神様の愛と哀れみ、恵みによって赦されたにすぎないのです。だから人に「おまえは」と指差せる人は一人もいません。人を指差した瞬間ほかの指は全て自分に向いています。神の愛に気付いたときに、イエス様の心で人を見ることができるのです。人が見たら裁きの目、傍観の目しかありません。それでは変わりませぬ。神の目で見るとき、人も環境も変わります。神の目で人を見ましょう。③**イエスの心が与えられたときに人をいかす裁きができる。**生かすと、裁くという180度違う方向のものを同じ方向に向けるのは神の愛でしかできません。「あなたがたのうちで罪のない者が、最初に彼女に石を投げなさい。」（ヨハネ8：7）この後、年長者から石を置いて去り、最終的に残ったのはイエス様だけでした。神の愛（アガペーの愛：無条件、無制限）が言動を変えた瞬間です。裁きは決して簡単なものでも気持ちのよいものでもなく、辛くさびしいものです。しかしそこに神様の愛があれば裁きで人を生かし、変えることができます。神様は人を生かすためにこの地に来てくださいました。「神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。」（ヨハネ3：17）神様は裁くためではなく、生かすために、教会を、そしてあなたを置いています。愛こそがすべてを変える力です。今日から神様の愛で歩んでいきましょう（要約者：岩崎祥誉）

～先週を振り返ってみよう！～

☆目標は達成できましたか？

()

☆一週間を振り返っての感想

◇◇今日のメッセージの感想◇◇

◇◇メッセージを受けて今週すべき事◇◇